

Title	懷徳堂関係研究文献提要 (二)
Author(s)	
Citation	懷徳. 1984, 53, p. 85-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90632
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

そさうくしけれ、又いつかかへりくめるなど、すへて

折にふれ事に(思)のそ(長)きて、な(美)か(美)くしうつくしうかきく

つさせたまふおほんふミ(御文)ともの、車(御形)にも(見)のせつへうなり

たるを、櫃におさめておほんかたミに見奉らんとすなる

を、其すき間より虫のはひ出たるをいふかり、ひらきミ

れハすへてミなしミ(新)のすミ家となれりける、紙(新)のあた

しきつよ(思)かるゑらみ出し、よひくやわらかなるほそな

りにきりて、紙繩(年)につくりて、母しろの君に奉らんと

す、さておもふに十とせかほと(思)のこのかた、したしきり

とさうせたる人いくそはくそ、むつかしくもつれたる事

の(由米)いてくめるいくたひそ、いまいそかし(度)ハうしと恨み、

くるしとかなしミ給ふらん、むべ世におひさぬ事よとお

もひ、又おもひの外のさちある時ハ、きこへあけて、か

の歎をうけ引てとおもふ心も(由米)いてきて、ものゝかなしき

につけて、さるにても心ひとつ(喜)による(悲)こひかなしミの、

たちまちに(心)いりかへる、あやしといふ(心)ころを歌につく

りて、かのかミ繩にくハへて奉りける。

うき折はなきもましはといひすてて

うれしきは世にあらハとそおもふ

ひのどのうし(丑)のとし(年)

七月廿日

誠之

誠之記

「密庵先生母堂書簡」

〈懷徳堂関係研究文献提要(二)〉

(4)論文…田中佩刀「中井竹山と「東征稿」」(明治

大学教養論集』51・昭和四十四年)

本論文は、中井竹山の漢詩集「東征稿」の日本漢文学史上における意義を認め、論者自身の実地調査と細井平洲の評語とに基づきつつ、多数の佳作を紹介し、その内容を考察したものである。

「東征稿」は、竹山の江戸への旅の途上における感慨よりなる各詩篇が、日記風にまとめられ詩集の体裁を成したものであり、帰途の有様を散文で綴った「西上記」と合せて、『東西遊記』として刊行されたものである。「東征稿」における竹山の旅は、決して公務に束縛された窮屈な旅ではなく、当時の文人の尚古趣味的な旅行と何ら異なることのない自由な楽しい旅であったと思われる。その裏付けともなる「東征稿」の特色の一つとしては、題詞や註に散見される竹山の文学・歴史・地理などに関する該博な知識があげられる。その内容も、林羅山「丙辰紀行」などと比べ何ら遜色がない。この文学や歴史などに対する造詣の深さが、余情あり時として軽妙な竹山の詩の骨格を形成していることは注目に価する。また、「東征稿」は、意図的に構成されたものではなく、竹山自身の旅が自らその体裁を成したものである。にもかかわらず俳諧の如き展開を有している点で、極めて魅力的な漢詩集であると言えよう。

竹山は、徂徠が華音に通ずることを文章の第一義としたことに反対の意志を示している。一時隆盛を極めた古文辞学派も竹山の時代に至るまでには衰退の兆しを見せ始めていた。古文辞学派は、和奥を嫌い中華の言語により自らを制約することによって自らが中国文学の模倣者・亜流とならざるを得なくなった時、必然的に崩壊する危険性を孕んでいたのである。竹山の活躍した時代は正しく反古文辞学の風潮が昂揚しつつあった時代であった。竹山は時代の趨勢を受けて日本文化に融合する日本人の漢詩文を指向したとすることができよう。「東征稿」の詩篇も、古文辞学派の見地からすれば完璧とは言い難いかもしれない。しかし、日本近世の漢文学史上にそれを置いて見た時、竹山の「東征稿」は正に日本人の漢詩として看過することのできない意義を有しているのである。

(5)論文・平 重道「懷徳堂学の発展(Ⅰ)」(『宮城教育大学紀要』3・昭和四十四年)

本論文は、教育機関としての懷徳堂の意義を十分に評価した上で、懷徳堂に関連した各思想家に懷徳堂学とも称すべき一貫した学風が存在したことを認め、その成立と発展とについて考察を加えたものである。(一)懷徳堂学に関するこれまでの学績、(二)懷徳堂書院の成立とその盛衰、(三)初期懷徳堂の学風、(四)富永仲基の学問と思想、以上四節より成る。

(一)西村天因『懷徳堂考』を最重要の参考文献として評価する

ほか、幸田成友編『大阪市史』巻一、岩橋小弥太「懷徳堂書院」など、堂学に関する先人の業績を多数紹介する。

(二)懷徳堂の成立とその盛衰とについて、主に三宅家と中井家・学主と預人との関係を通して考察を加える。三宅家の持つ町人的な自由・妥協・好事の学風は、官許学問所となった懷徳堂の官学的な性格とは合致しない。その結果、權威主義的な竹山の独裁に転換を迫られたのである。また、その衰退の原因としては、傑出した指導者の不在を第一にあげるべきであるが、それに加えて財政の破綻・学主寒泉と預人桐園との関係なども考慮に入れるべきであろう。

(三)懷徳堂の学風は、石庵・蹇庵・春楼の初期創学時代、竹山・履軒・碩果の中期隆昌時代、寒泉・桐園の後期漸衰時代に三分し得る。初期の学風の特徴としては、実践主義と教養主義との二点をあげるべきであろう。石庵は、学問は孝悌を中心とする人倫道德の実践であると考えた。蹇庵においても、実践主義が道德から経世へと拡大し実学主義的色彩を帯びて来るという変化はあるが、その主眼はなお常識的な実徳主義にあった。

この道德的な実践主義は、町人の実利・実用の精神を満たすものである。また、石庵らは、漢学のみを素養に止らず、謡曲・書・俳諧など幅広い教養を身につけていた。この教養主義は、町人の自由・享樂の精神を満たすものである。これらの学風に基づく実利・平明・自由を重んずる懷徳堂の教化精神は、町人の学問的関心を喚起するために大なる効果を納めたのである。

(四)初期懷徳堂を代表する学者としては、富永仲基と五井蘭州とがあげられる。蘭州が蹇庵の特権的な官学主義を継承してい

るのに対し、仲基は石庵の町人的な私学主義を継承している。石庵の自由討究・一説に固執しない柔軟な学風を継承した仲基は、儒教から仏神へとその研究を進め、儒仏神を批判しつつその中より三教を一貫する独自の思想を構築するに至った。その思想の骨髄とでも称すべきものが『翁の文』であり、それを通して仲基が主張したものは、誠の道の観念であった。儒仏神の三教には、現実生活には決して適合しない不純物が混入されている。これに対し、誠の道は、現実生活を肯定する所に成立し人間生活の調和を第一義とする簡直平明な教道なのである。仲基の誠の道は、必ずしも新奇なものではない。しかし、三教に対し加上法という容観的な歴史実証主義的研究方法で鋭利な批判を展開したという点においては、不朽の功績が存すると言わねばならない。

(6) 論文・平 重道「懷徳堂学の発展(II)」(『宮城
教育大学紀要』5・昭和四十六年)

本論文は、「懷徳堂学の発展(Ⅰ)」の続篇である。(a)五井蘭州の学問と思想、(b)中期懷徳堂の学風と中井竹山、(c)中井履軒の学問と思想、以上三節より成る。

(a)五井蘭州は、父持軒の学問を継承しつつ、かつ石庵の思想をも暗黙裏に継承している。石庵が諸学折衷の傾向を有していたのとは異なり、持軒は朱子学尊信の態度を崩すことがなかった。これは、石庵においては諸学派を止揚し原義を把握せんと

する自由な批判主義となって現れ、持軒においては宋学を通じて矛盾を修正せんとする修正主義となって現れている。持軒の学を継承した蘭州が朱子学に学問的根拠を求めたことは言うまでもない。これによって従来の懷徳堂の曖昧な学風は刷新され学風の基礎は朱子学に固定されたのである。一方、石庵の道德実践主義を継承した蘭州は、人倫の道たる儒教と異教との關係を考察することにより護教的な異端批判論を展開した。その特色として注目すべきは、あくまで宋儒の理説に立脚するとは言え、西洋の科学思想を思わせるが如き合理主義的精神を導入している点である。これによって懷徳堂の現実的な学風は合理主義という根拠を得たのである。また、蘭州の有していた実学思想にも注目すべきである。やがて竹山・履軒の手によって経済論として大成される蘭州の実学的傾向は、従来の堂学における個人中心の実践主義を發展させ、社会経済との接觸面を開拓したのである。

(b)中期懷徳堂を代表する学者は、言うまでもなく中井竹山と中井履軒とである。履軒が隱逸的な性格で研経尊重の学風を有していたのに対し、竹山は世俗的な性格でその学風も甚だ実学的であった。竹山の学問の特色は、異端攻駁とその実学思想とにあったと言える。竹山が異端として徹底的に攻撃を加えたものは、仏教と譚園学とである。竹山の排仏論は、仏教の邪説が民心を惑乱させ社会争乱の因となる点、及び仏寺経営に莫大な費用を要し国力消耗の因となる点などの社会的弊害に力点を置きつつ、それを防止するための政策論にまで言及している。徂徠攻駁においては、蘭州の攻駁が經学に集中したのとは異な

り、経学・詩文・正名の三方面から徂徠学の大家を天下に叱咤したという点に特色が認められる。これらの攻駁は、おおかた宋学に依拠している。竹山の宋学の特色は、程朱の根本思想を離脱することは慎まねばならないが、その経説の本旨を發明することは自由であるとす点にある。しかし、この思想と経解との分立論には、経説の自由討究を徹底すればやがて一種の思想的立場が生じ程朱を離脱してしまうという危険性があつたと言える。それは、やがてより沈潜的な履軒の経解において明らかとなるのである。竹山の実学思想の性格は、封建社会と町人勢力の勃興とについての見解を考察することにより明瞭となる。竹山は、徳川封建制を最善の政治形態と考へ、現実肯定の立場からの封建制への帰順を指向していた。町人の富力・商工業の必要性を認める実利論・自由商業論などは全て、封建制の枠組を離脱することを目的としたものではなかつたのである。

(4)履軒の学問の中心は研経である。とりわけ精力を注いだのは経史の研究においてであり、その成果は『七経逢原』などの書に顕著である。その研経の特質は、孔孟の本旨を探究することを目的としたため、程朱の学説であつても時としてそれを排除する姿勢を有していた点にある。研経は注釈を墨守することではなく、經典の本義を發明することなのであつた。履軒の治経はまず經典批判より始まる。その結果、『論語』『孟子』『中庸』を尊崇し、『易・十翼』や『春秋』を孔子の筆に非ずと断ずるに至るのである。内容を把握する際には、随文取意の原則により、後儒の附会と思われるものは尽くこれを排除するという考証学的姿勢を示した。宋明学の批判と孔孟の古意発揚が考

証学の成立を俟って完成するものとするならば、かくの如き履軒の古注学は、宋注の注釈学的な不備を内面的に立証し、古文辞学と考証学との間隙を埋める意義と位地とを有するものであろう。履軒の異端排斥論の特色としては、内面的な老子批判、老子・道教の両異説などがあげられる。また、その史学思想においては、史学における実証性を追求したこと、斥覇論を唱道したことに特色を見出すことができよう。実学思想における特色としては、竹山が現実肯定の立場から封建制の範囲内ではあるが町人の存在を肯定しているのに対し、履軒は一種素朴な農村共產制を理想としている点をあげることができる。

竹山と履軒とは懷徳堂最大の思想家であり学者であつた。竹山の实学と履軒の経説とは共に当代に卓越し、両者は堂学の指導者たるに止らず当代を代表する思想家であつた。懷徳堂の隆盛時代である。しかし、懷徳堂の中心思想たる宋学は、考証学や蘭学の実証主義・合理主義的傾向に圧迫を受けて成立した修正主義的な宋学であつた。懷徳堂の宋学が一步進展することを望むなら、竹山・履軒の修正主義を更に克服していく必要があつたのである。

(佐藤一好)